

真のバリアフリー・ユニバーサルデザインとは

車いすを使って生活しているある日本人が、イタリア旅行をした時のことです。

石畳のあるイタリアの伝統的な街を観光しているうちに、風情のある小さな料理店に目が止まりました。車いすから見上げるとほとんどの店が立派な石組みの階段の上であり、自力では入店できそうにありません。

それでも、この店の様子を伺うため、車いすから少し体を浮かして、伸び上がろうとしましたが、うまくいきません。

そうこうしているうちに、体が一瞬、ふわっと浮いたかと思うと、店の玄関のところに車いすごと移動していました。後ろを振り返ると屈強な男性2人が、道の別々の方向に立ち去っていくところが見えました。あまりに突然のできごとで、呆然としていましたが、どうやら、店の前を通りがかった人が、その様子を見て、玄関から入れるように車いすごと持ち上げてくれたのです。

帰る際にも、店の中にいた人が、車いすごと持ち上げて、石畳の道に下ろしてくれました。この街では、これ以外にも、何度かそういったことがありました。

帰国後は、残念ながらそういう経験がほとんどなかったそうです。

我が国にも、今日では、観光地や駅に体の不自由な人用のトイレやスロープが、広く普及してきていますが、まちの中を見ると体の不自由な人が安心して行動できる場所がまだまだ少ないように思えます。この世の中のすべてのものがバリアフリーやユニバーサルデザインでつくられたものであったとしても、人の心のやさしさや思いやりがなければ、本当の意味での「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」にはならないといわれています。

イタリアで出会った男性のように、私たちが自らの行動を「デザイン」すれば、バリアフリーやユニバーサルデザインでさえ実現できないことが、その瞬間に実現できるのではないのでしょうか。

宇陀市人権啓発活動推進本部